

夢・きらめき 豊中っ子

言葉で伝えられる
楽しさ

村越 桜さん

モーツァルトのオペラ『ドン・ジヨバンニ』の中で歌われるアリア※1「恋人よ、さあこの薬で」。イタリヤ語の歌を生き生きと歌うのは豊中高校3年生の村越桜さん（17歳）。

幼稚園のころから歌うことが好きで、地域のイベントなどに参加して合唱やドラマの挿入歌を歌っていた村越さんが声楽と出会ったのは、小学4年生のとき、知り合ったピアノリストの富岡潤子先生に勧められたコンクール「すいたティーンズクラシックフェスティバル」でした。クラシックのことはあまり知りませんでした。プロの音楽家からレッスンも受けることができる」と聞き、声楽部門で参加を決意。賞を受賞することはできませんでしたが、「声をそろえて全員で一つの音楽をつくる合唱とは違って、自由に自分の表現で歌えるのが楽しかった」と声楽の魅力を知りました。その後もミュージカルの舞台に出演するなど、人前で歌うことを続けていきます。

本格的に声楽を始めたのは中学2年生のころ。「中学生になった今、もう一度あのフェスティバルに出

場しよう」と、第7回同フェスティバル入賞を目標に前回も審査員を務めた高木ひとみ先生のレッスンを通うように。自宅での練習のほか、週1回のレッスンを約半年続けて力を付けます。ピアノやバイオリンなどさまざまな部門がある中、中学生以下で将来性がある演奏者に与えられる「さつき賞」を見事受賞。声楽部門での受賞者は初めてでした。

このころから音楽大学への進学を意識し始め、高校進学と同時に楽典の勉強を開始するほか、声楽セミナーにも積極的に参加。さらに経験を積むため、さまざまなコンクールに挑戦するように。

高校2年生の時、高木先生に参加を勧められたのが「第11回東京国際声楽コンクール」。順調に地区予選を突破し、8月の西日本準本選で歌ったのはモーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』より「とうとう嬉しい時が来た」。ゆったりとしたテンポですが音の跳躍が多く、村越さんには少し難しい曲でした。それでも好きな曲を歌ってみようと挑戦すると9位に入選。初の全国大会出場を決めました。



9月の全国大会のために選んだ

曲は「恋人よ、さあこの葉で」。村越さんにとっては歌いやすい曲です。西日本準本選での9位という結果に焦りを感じ、「イタリア語の歌詞を聴く人にきちんと届けたい」。その思いからレガート※2に歌えるようにと、さらに練習を続けて挑みました。

本番直前、舞台袖で出番を待っていたときに事件が起こります。緊張のあまり歌詞の順番が分からなくなってしまうのです。舞台袖には村越さん一人。暗い中では楽譜の確認もできません。前の人の演奏が終わり、パニックのまま舞台上に。それでも思い切って

「Vedrai carino Se sei buonino
〜♪」

と歌い始めると、自然と歌詞が出てきます。「音だけでなく歌詞で表現できる声楽。聴く人に伝わる言葉で歌おうと、イタリア語の発音や歌詞の意味を調べたりオペラでこの歌を歌うツェルリーナの心情を考えたりと練習を重ねたおかげだったのかな」と振り返る村越さん。大切にしてきた歌詞はしっか

りと身に付いていました。

演奏を終えると、無事終わった安堵と本番前のシヨックで涙があふれます。「無事に終わったんだから、結果を待とう」と母親の美幸さんになだめられ、迎えた結果発表。西日本準本選で村越さんよりも上の順位だった知人が「奨励賞」で名前を呼ばれます。「じゃあ自分は賞をもらえないな。そう思いながら拍手をしていた次の瞬間、第5位で村越さんの名前が呼ばれます。初めて出場した全国大会を「思わぬ順位に驚きましたが、本番前に歌詞を忘れてしまったこともいい経験になりました」と振り返ります。

オペラもミュージカルも、歌うことなら何でも好きな村越さん。「音楽大学に進学して、どんな道に進むとしても、歌い続けたい」と夢を語ってくれました。

※1 歌劇などの独唱部分

※2 音と音を滑らかにつなぐように演奏すること